

文の分類と「が」「は」

半藤 英明

*

「私は男だ。」と「早く行け。」とでは、文のタイプが異なる。前者は「平叙文」、後者は「命令文」である。一般的には「平叙文」「命令文」「疑問文」「感嘆文」の4分類が言われるが、それらは元々英文法にならった類別ともされ、様々な日本語分析の場面において不都合を生じさせることも、ないではない。例えば「それみたことか」は、表現形式としては疑問文であるが、意味内容的にも疑問であると直ちに受け取れるであろうか。即ち、この4分類は、必ずしも万能ではないのである。

* * *

日本語研究の中には、「が」と「は」の言い換えを駆使する等の手法により、その違いを見出そうとする対照研究が数多く見られる。が、助詞の分類上、「が」は格助詞、「は」は係助詞であり、機能が異なる。そのため、並行的に比較・

分析したのでは、用法上の違いは明らかにし得ても、それらの使い分けの点で疑義が残る。ここに筆者は、「が」と「は」の使い分けの問題を、文の分類との関わりで論ずる。それらの使い分けが、文の分類と連動していることを紹介したいがためである。

* * *

格助詞「が」の機能は、「格」表示の機能である。「格」とは、文中で上方に位置する体言と下方にある述語用言（動詞・形容詞・いわゆる形容動詞）との関係のあり方を指す概念である。述語用言が表す動作・状態・存在・属性の主体に当たるのが主格であり、例えば「食べる」という動作の主体は、主格助詞「が」により「猫が」と示される。また、何を食べるのかという動作対象は、対格（目的格とも）助詞「を」により「魚を」と示される。そこに「猫が魚を食べる」という文の成立がある。それぞれの格は、述語用言にあらかじめ設定されているものとされ、必要に応じて表現として顕在化するが、文の理解上、自明であることを強くすれば省略されもする。

格が述語用言に設定されるものである以上、体言に助動詞を付した「男だ」のような述語形式に格の存在は想定しにくい。即ち、『男だ』という述語からは主格助詞『が』の表示が要求されにくいのである。そこに登場するのが

「は」である。

係助詞「は」の機能は、係機能（取り立て機能）と言い、上接する体言・連用語と下位の述語との関係の特化（重点化）して意味形成（主題・対比）を行うものである。体言とはモノ・コト、即ち、事物を表す語性にあり（サマ、即ち、状態を表すものは形容動詞の名詞成分となる）、体言と述語との関係を特化して示す上では、その体言が如何なるもの・ことであるのかを説明すること（主題―解説の構造ということ）が最重要となるため、「犬は動物だ」のように、文の形式は体言に助動詞を付す述語形式、「名詞述語文」が基本となる。一方、連用語（格の表現・副詞・活用語の連用形）と述語との関係を特化することは、もとより下位の用言に対する連用修飾形式に介入することであるから、当然、名詞述語文は形成されず、従って、ほぼ主題―解説の構造にはなり得ず、「国内旅行には行く（海外旅行には行かない、の）ごとき含みが生ずる」のように対比の用法となる。

前述の『『男だ』』という述語からは主格助詞『が』の表示が要求されにくい」の解説に戻るが、「男だ」を述語にすることは、名詞述語文を形成するということである。名詞述語文を作るのは「は」の基本とするところであるから、「男だ」を述語とする文では「私は男だ」のような「は」構文

が典型となる。つまり、名詞述語文の主述構文（主語・述語の構文）は、「は」構文が典型なのである。「私が男だ」のような「が」構文は、名詞述語文の典型ではなく、本来は格関係を持たない述語（名詞述語）に敢えて格を押し付けることで、「他の誰でもない、私が」の意を持つ特別な用法（言語学では「総記」という）になる。

名詞述語文と並立的な存在が「動詞述語文」「形容詞述語文（便宜的に形容動詞による述語文を含める）」である。前述の通り、述語用言には格が設定されるから、動詞述語文は格の表現を通常のものとし、その主述構文は「が」構文を典型とする。従って、動詞述語文に「は」を使用することは、格の表現を主題―解説の構造に組み替えることである。例えば「風が吹く」は動詞述語文としての典型であるが、「風は吹く」はその特殊型ということになる。形容詞述語文にも同様のことが考えられるが、私見によれば、形容詞述語文は格の表現として安定的ではない。その主述構文は、「地球は丸い（球形だ）」「福沢諭吉は偉い（偉大だ）」のように「は」を好む場合が多く、概して「が」も「は」も選択し得る。形容詞述語文の主述構文が「が」構文で安定しないことは「形容詞（および形容動詞）」には格が存在しない」ことの現れと、従来の説とは反することを筆者は考えるが、ここでの深入りは避ける。

上記より、少なくとも次の点を確認しておく。

・名詞述語文の主述構文は、「は」構文を典型とする。

・動詞述語文の主述構文は、「が」構文を典型とする。

従って、これらの典型から外れたものは特別の意味・意図を籠めた用法と解されることになるが、それについては「が」「は」それぞれ、または、助詞関連の各研究書に議論があるので参照されたい。読者からのご要望があれば、お応えもする。

「が」と「は」の使い分けの問題では、如何なる述語文であるのかということが重要なのであり、冒頭の文の分類（4分類）からは見えないところが明らかとなる。即ち、文の分類ということでは、述語の種類からの分類ということも重視されなければならないのである。しかも、このことは「日本語が述語を中核とする」という日本語研究上の通念を再認識することでもある。

